

# 横尾地区遺跡群 III

—県営ほ場整備事業横尾地区に伴う埋蔵文化財発掘調査概報—  
中沢遺跡C区・桃瀬遺跡B区

1996.3

群馬県中之条町教育委員会

## 序

群馬県北西部の吾妻郡に位置する中之条町は、文化・交通の要所として、豊かな自然環境のもとで古代から現代にまで渡って発展してきており、今日までの道筋は各方面のアプローチにより次第にはっきりとしてきています。

近年の埋蔵文化財発掘調査におきましても、厚手の本を一頁ずつ捲って行く様に新たな歴史が目前に現れてきています。そして、その埋蔵文化財発掘調査に直接・間接に参加して頂いた方々も増えてまいりました。このこと自体が、いにしえからの文化を後世に伝えて行くための大切な事であり、埋蔵文化財発掘調査の意味する所もあります。

さて、県営は場整備事業横尾地区に伴う埋蔵文化財発掘調査においても、古代の遺跡が確認されています。今回中沢遺跡C区と桃瀬遺跡B区において確認された住居跡も、名久田川流域に広く展開する集落跡の一部として位置づけられます。そして、さらに中之条町で確認されている遺跡との関係や群馬県北西部での位置づけなど、各地域との比較のための資料としてこの遺跡の概要を報告させていただきます。

いにしえから現代に至るまでという時間の縦糸と、今回調査された住居跡の時代の文化という横糸の一部として、この成果が現代から未来への文化の発展の中で、研究・教育等に活かされますことを念じてやみません。

最後になりましたが、今回の発掘調査の実施にあたりご指導、ご協力を頂きました関係各位に対し深く感謝申し上げます。

平成8年3月29日

中之条町教育委員会

教育長 中澤 恒夫

## 例　　言

- 1 本書は、県営埋場整備事業横尾地区に伴い、中之条町教育委員会が平成6年度に実施した、横尾地区遺跡群中沢遺跡C区及び桃瀬遺跡B区の発掘調査概要報告書である。
- 2 中沢遺跡C区の発掘調査は、平成6年5月16日から平成6年8月10日までを行い、桃瀬遺跡B区の発掘調査は、平成6年12月5日から平成7年3月31日まで行った。両遺跡の遺物整理は平成6年度及び平成7年度を行い、報告書の作成は平成7年度に行った。
- 3 発掘調査は、群馬県渋川土地改良事務所の委託を受けて、中之条町教育委員会が実施した。
- 4 発掘調査の経費は、渋川土地改良事務所からの委託金、国宝重要文化財等保存整備費国庫補助金、群馬県文化財保存事業補助金及び町費を充てた。
- 5 調査組織は以下の通りである。

教育長	中澤 恒夫
社会教育課長	植木 正勝
社会教育係長	水出 隆夫
社会教育課主事	山田 俊彦（調査担当）
- 6 本書の執筆及び編集は、山田俊彦が行った。
- 7 遺構実測図のトレース及び挿図作成は、福嶋美佐（社会教育課主事）を中心に小淵幸子、清水夏子が行なった。
- 8 遺構の写真撮影は、福嶋美佐、山田俊彦が行った。遺物の写真撮影は須崎幸夫（社会教育課主事）が行った。
- 9 本調査における記録・出土遺物については、中之条町教育委員会が保管している。
- 10 調査並びに本書の編集に際しては、下記の方々にご指導ご協力頂いた。（敬称略）  
群馬県教育委員会、渋川土地改良事務所、株式会社測研
- 11 発掘調査の協力者は下記の通りである。（五十音順・敬称略）  
青柳七郎、伊東貞代子、入澤芳子、清水夏子、関トシエ、田村さだ、富澤美野留、生須博、浜野住次  
原沢とし子、星野麗子、山本芳雄、綿貫狗子、綿貫宮子

## 凡　例

- 1 遺構実測図中の断面基準線は標高で表わし、方位記号は座標北を示す。
- 2 グリッドについては国家座標を用い、表記については座標値の下3ヶタを使用している。  
(例) 0 1 0 - 3 4 5 G : X = 6 7 0 1 0 , Y = - 8 6 3 4 5
- 3 遺構実測図の縮尺は次の通りであるが、一部に例外もある。  
全体図 1 / 4 0 0 住居跡・土坑・溝状遺構 1 / 6 0
- 4 遺構・遺物写真の縮尺は統一していない。

## 目　次

序	
例言	
凡例	
目次	
報告書抄録	
I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の位置と周辺遺跡	1
III 調査の方法	1
IV 中沢遺跡C区	
1 基本層序	3
2 調査の概要	3
3 検出された遺構と遺物	4
V 桃瀬遺跡B区	
1 基本層序	2 2
2 調査の概要	2 2
3 検出された遺構と遺物	2 3
写真図版	

## 報告書抄録

ふりがな	よこおちくいせきぐん						
書名	横尾地区遺跡群 III						
副書名	県営は場整備事業横尾地区に伴う埋蔵文化財発掘調査概報						
卷次							
シリーズ名	中之条町埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ番号	第14集						
編著者名	山田俊彦						
編集機関	群馬県中之条町教育委員会						
所在地	〒377-04 群馬県吾妻郡中之条町大字中之条町1091 TEL 0279-75-2111						
発行年月日	西暦 1996年3月29日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 ***	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
中沢遺跡C 区	群馬県吾妻郡 中之条町大字	10421			19940516 19940810	1,300	県営は場整備
桃瀬遺跡B 区	横尾				19941205 19950331	100	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
中沢遺跡C 区	集落跡	古墳時代 ～ 平安時代	竪穴式住居跡 土坑 溝跡	15軒 6基 2条	土師器 壁・塼・甕 須恵器 壁・塼 鉄製品 鉄鎌・刀子 石製品 紡錘車・臼 玉		
桃瀬遺跡B 区			竪穴式住居跡 土坑	3軒 1基	土師器 甕		

## I 調査に至る経緯

県営は場整備事業横尾地区は、中之条町の東部、名久田川の右岸に位置しており、約154.2haの面積を占めている。この地区には、奥山原遺跡、長久保遺跡などの周知の遺跡が多数存在しているほか、平成2年度に行った本地区的分布調査により、埋蔵文化財の包蔵地が広範囲に及んでいることが明らかになった。このため、淡川土地改良事務所及び町農林課土地改良係と協議を行った結果、道水路部分及び遺構が破壊される切土部分については、埋蔵文化財の発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることになった。

## II 遺跡の位置と周辺遺跡

中之条町は、県の北西部を流れる吾妻川北岸に位置し、1県2郡7町村に接している。北に新潟県南魚沼郡湯沢町、西に六合村、南に吾妻町、南東に東村及び北群馬郡小野上村、東に高山村、北東には利根郡新治村である。地図の中の中之条町は、「東側を「かなめ」にして東西方向に置いた扇を北に向かって45°ほど広げた」形に見える。南東方向から西・北西方にかけては、未広がりに奥行きのある地形となっている。

南東の小野上村方面から国道353号線で中之条町に入ってきたら、町並の北に嵩山(7.89m)があり、中之条盆地の北側に聳えている。南の吾妻町金井方面から中之条町を望むと嵩山だけではなく雄川岳(8.53m)の存在も大きく見える。

中之条盆地は屏風状で南東に口を開いた馬蹄形状に続く山々に囲まれている。北から稲包山(15.97m)、北西に相ノ倉山(15.67m)、西に幕坂峠(10.88m)とこの辺りでは比較的高い海拔の山が続く。南には吾嬬山(11.81m)、薬師岳(9.74m)がある。南東には十二ヶ岳(1200m)が、そして北東から北へは大道峠(8.30m)、赤沢山(14.54m)から前記の稲包山へと続く。

中之条町には大小の河川が流れ。町の中央部を北から南に流れる四万川が、町の南を西から東に流れる吾妻川に流入する。この四万川には西から東に流れる上沢渡川が合流している。別に名久田川が北東方向から南西方向に流れ、吾妻川に流入する。この名久田川は、中之条町の東側の町村境を超えた高山村からの流入である。

中沢遺跡C区は横尾地区の北東部に位置し、名久田川右岸の河岸段丘に連なる丘陵の東側斜面に立地する。調査区の海拔は3.82mから3.88mで、狭い範囲に住居跡が段々畝状にはば3段に存在するのが確認された。桃瀬遺跡B区は、地区南側を東流する桃瀬川の右岸に位置する。調査区の現状はともに畝であった。

これまでに実施した県営は場整備事業横尾地区に伴う調査としては、七日市遺跡A・B区、中沢遺跡A区、小塚遺跡があるが、この他に周辺地域で中之条町教育委員会が調査を行った遺跡としては、天代瓦窯遺跡、名久田8号古墳、大塚遺跡群の五十嵐遺跡・宿割遺跡・平遺跡群の下平遺跡・下尻高遺跡・菅田遺跡、伊勢町地区遺跡群(上原遺跡・天神遺跡・川端遺跡)が挙げられる。

## III 調査の方法

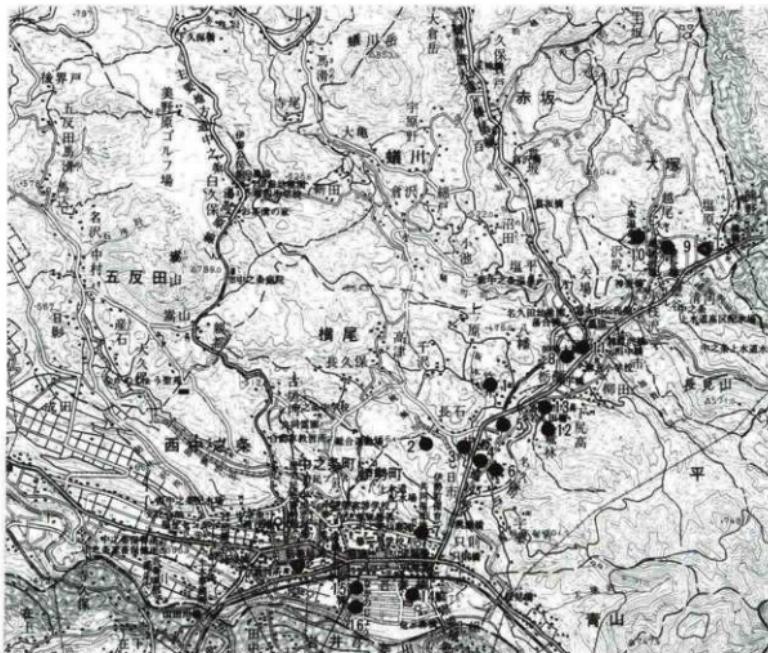
中沢遺跡C区の調査は、試掘調査の結果をもとに本調査の範囲を設定し、遺構確認面までの深さを参考に廃土場所の確保を行い、重機による掘削から着手した。調査区が傾斜地であるため、確認面までの掘削は特

に慎重に行ったが、すでに耕作によって攪乱を受けていたこともあって、この時点で削平された遺構もあった。

重機による掘削と作業員による確認面の精査を平行し、プランの確認を行った。確認されたプランは石灰にて線引きした。調査区全体の確認を終えた後、遺構調査前の全景写真を撮影し、基本土層の記録を行った。

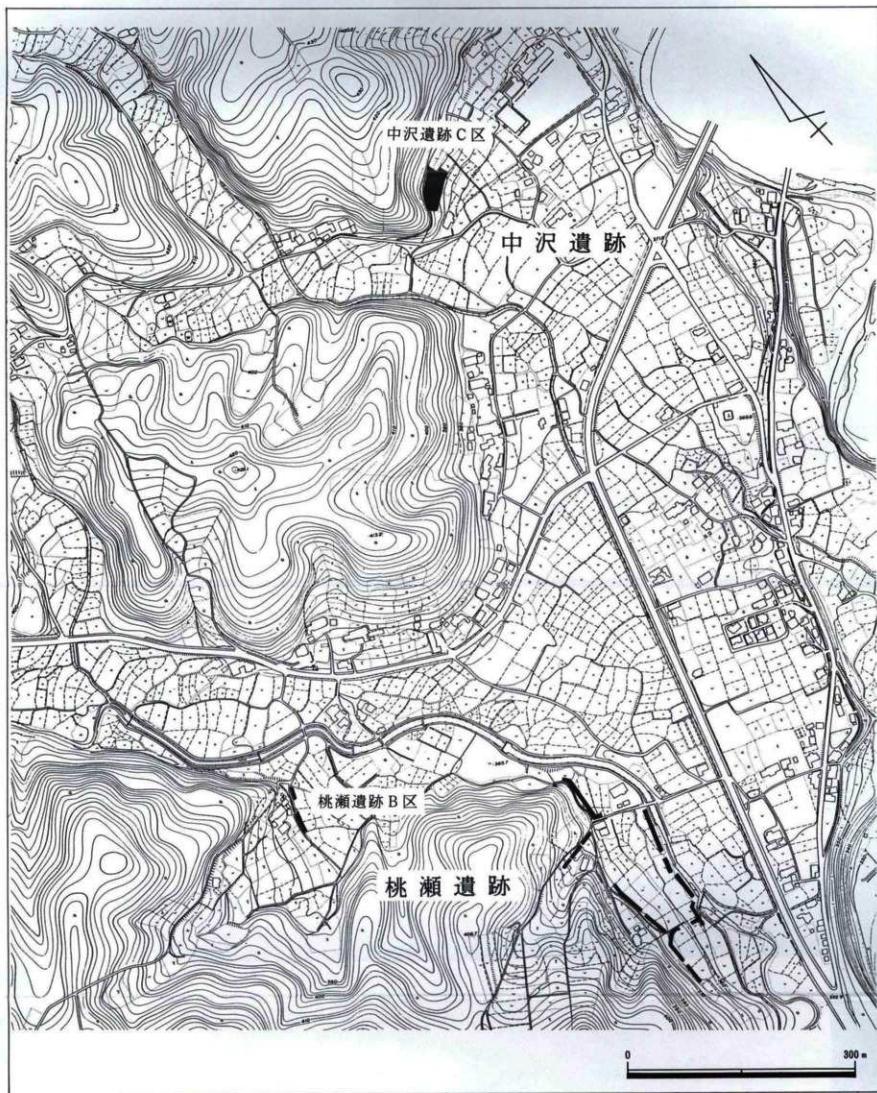
遺構の調査は、覆土に浅間一柏川テフラ（以下柏川テフラと略記）を含む遺構から開始した。この作業の終了後、株名一渋川テフラ（以下FAと略記）を含む遺構を調査した。調査は複数の遺構を平行して行い、図面作成、写真撮影、遺構の観察等を順次行った。特に残存状態の良いカマドについては、 $1/10$ の縮尺でカマド図を作成した。基本的には掘り方まで調査を行って各遺構の調査を終了し、最終的には完掘状態の調査区全体図を作成し、全景写真的撮影後に遺跡の調査を終了した。

桃源遺跡については、工事計画に基づいてA・B区と区割りし、道水路部分を対象に試掘調査を実施した。

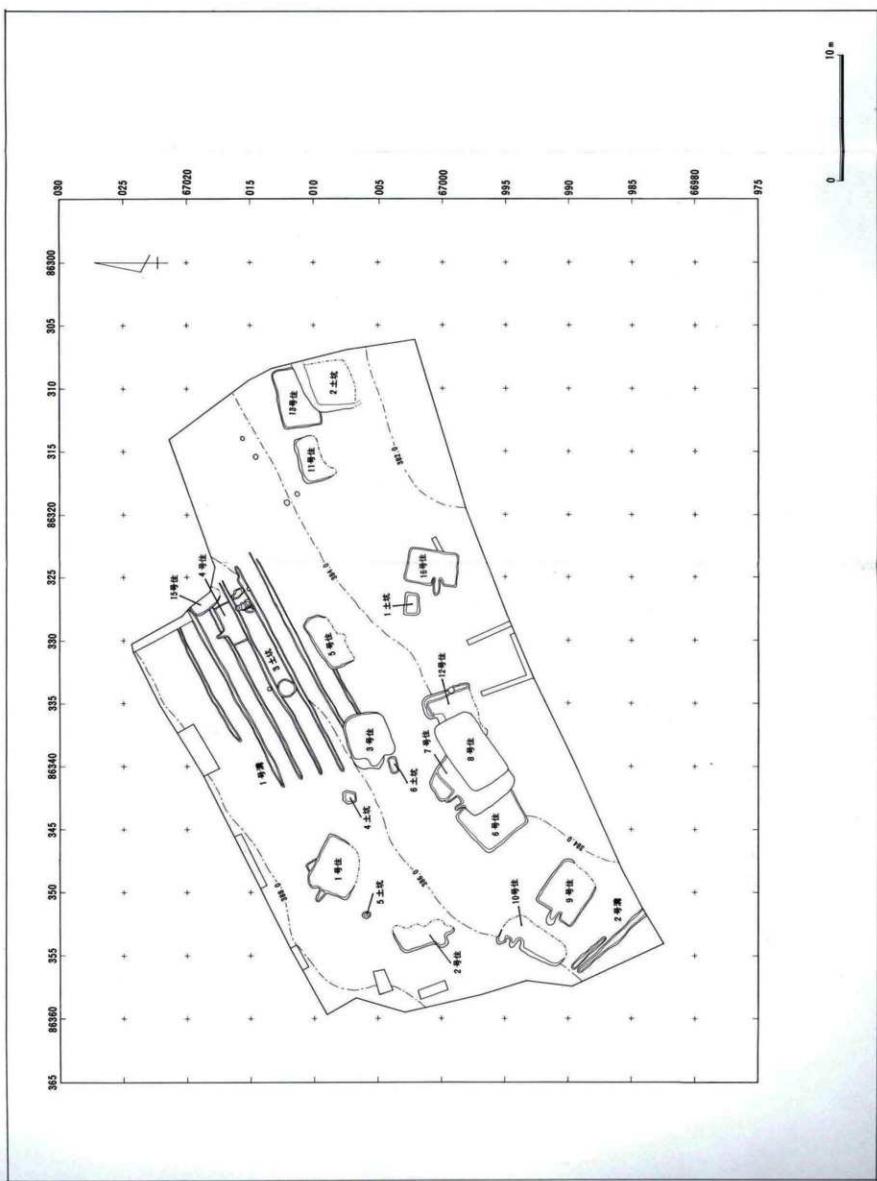


1 中沢遺跡C区 2 桃瀬遺跡B区 3 七日市遺跡A区 4 七日市遺跡B区 5 中沢遺跡A区 6 小塚遺跡  
7 天代瓦窯遺跡 8 名久田8号古墳 9 五十嵐遺跡 10 須割遺跡 11 下平遺跡 12 下尻高遺跡 13 菅田遺跡  
14 上原遺跡 15 天神遺跡 16 川端遺跡

第1図 遺跡の立地と周辺遺跡（1/50,000）



第2図 遺跡調査区設定図(1/5,000)



第3図 中沢遺跡C区全体図

この結果、いずれの地区からも住居跡をはじめとする遺構の存在が確認されたが、B区については遺構を確認した地点の面積を広げるかたちで継続して本調査に着手した。調査区は、南北方向のトレンチを東西方向にわざかに広げて設定したため、いずれの遺構も部分的な確認に止まった。重機による掘削の終了後、作業員による確認面の精査を行い、プラン確認を行った。遺構の調査は、図面の記録、写真的記録、遺構の観察等を行った。基本的に掘り方まで調査を行った。桃瀬遺跡については冬期の調査となつたため、凍結や降霜を防ぐためにシートをかけるなど、遺構を保護する処置を行いつつ調査を進めた。

## IV 中沢遺跡C区

### 1 基本層序

下に示す土層断面は、000-345Gにて記録した。III層以下はいわゆるローム土である。色調については、「新版標準土色帖」に掲載した。

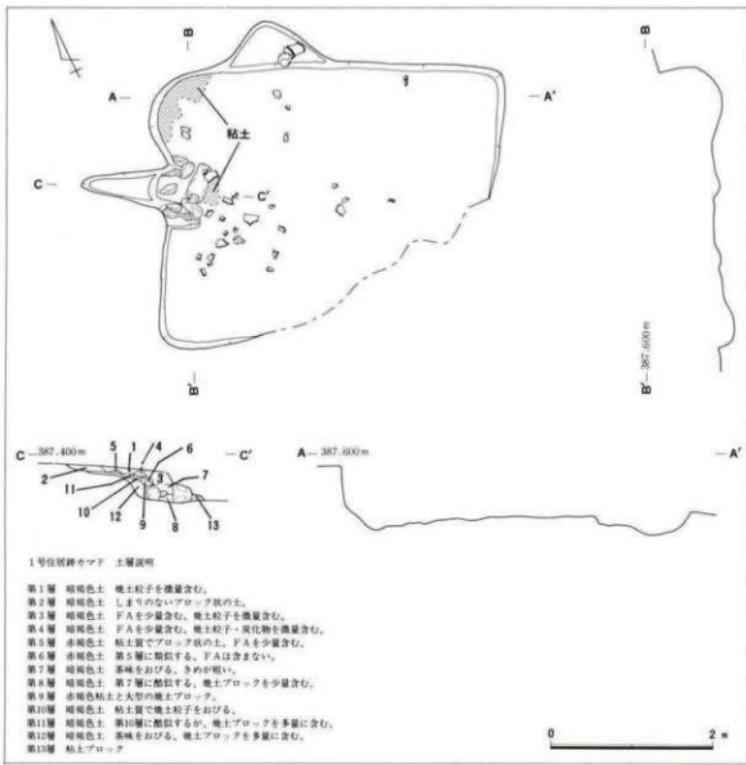


第4図 中沢遺跡C区基本土層

### 2 調査の概要

本調査に先立ち、試掘調査を中之条町教育委員会（担当課原充調査員）が行った。現状の畑の地形に沿って試掘トレンチを入れた結果、複数の住居跡のプランが確認された。この結果を踏まえて、対象範囲、調査確認面を決定し本調査に着手した。調査では、15軒の住居跡、2条の溝状遺構、6基の土坑が確認された。

### 3 検出された遺構と遺物



第5図 1号住居跡

### 1号住居跡

1号住居跡は、調査区の北西（010-345G）で確認された。確認面の海拔は387mである。住居跡の南側部分は削平されている。

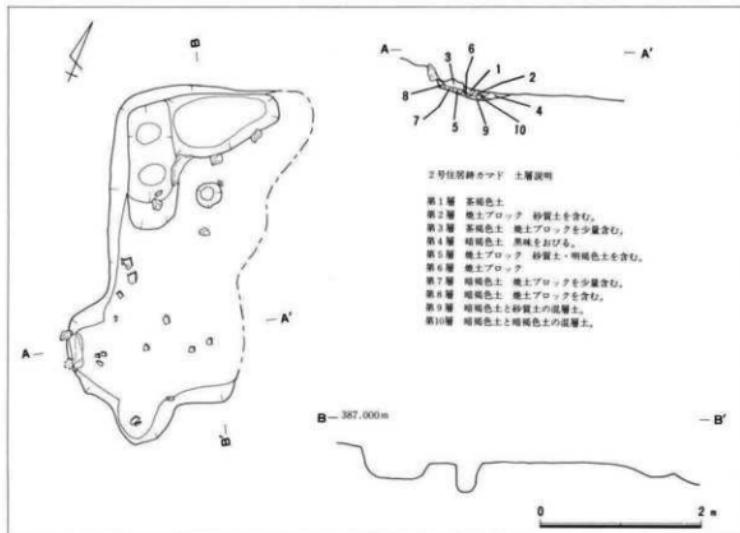
カマドはA・Bの2つが確認できた。北西方向の断面図を掲載した方がAカマド、北東方向のものがBカマドである。

Aカマドの床面は、地山のローム土をほぼ水平に掘り下げて床面としている。壁の立ち上がりはほぼ垂直

で、地山のローム土が立ち上がっている。本住居跡の北隅には、この壁に貼り付けてあったと思われる粘質土の崩落跡が確認できた。

Bカマドの床面は粘質土で貼床されている。この高さは、Bカマドの火床面とほぼ同じ高さで、Aカマドの床面と比べて1.5cmほど高い。しかし、床面を確認することができたのはカマドの周辺部分のみであったので、その他の遺構の構造については不明である。

遺物出土の頻度が高かったのは住居跡の西側部分で土師器の甕などが出土している。これらはAカマドのもので、Bカマドの遺物は僅かである。



第6図 2号住居跡

## 2号住居跡

2号住居跡は、調査区の北西隅(005-350G)で確認された。確認面の海拔は386.6mである。住居跡の東側は削平されている。

主軸は西である。カマドの煙道部の確認はできなかったが、焼土と土師器の甕の破片及び地山の土が激しく混ざり合っているのが確認された。焼土は鮮やかな赤色であった。

床面は、ほぼ水平でしっかりと貼床が確認でき、カマド前の床面には焼土が散らばっていた。床面の東側ではっきりとした範囲は確定できなかった。地山は東側が黒色土で、西側はローム土である。壁の立ち上がりもはっきりとしている。柱穴と考えられるピットは1基のみ確認された。

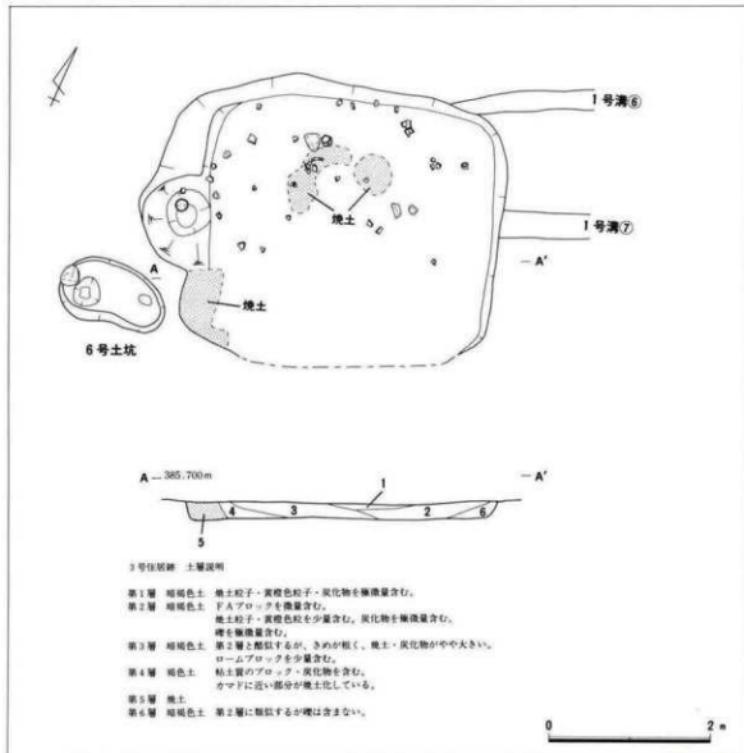
遺物は土師器の甕、須恵器の壺などが出土している。

### 3号住居跡

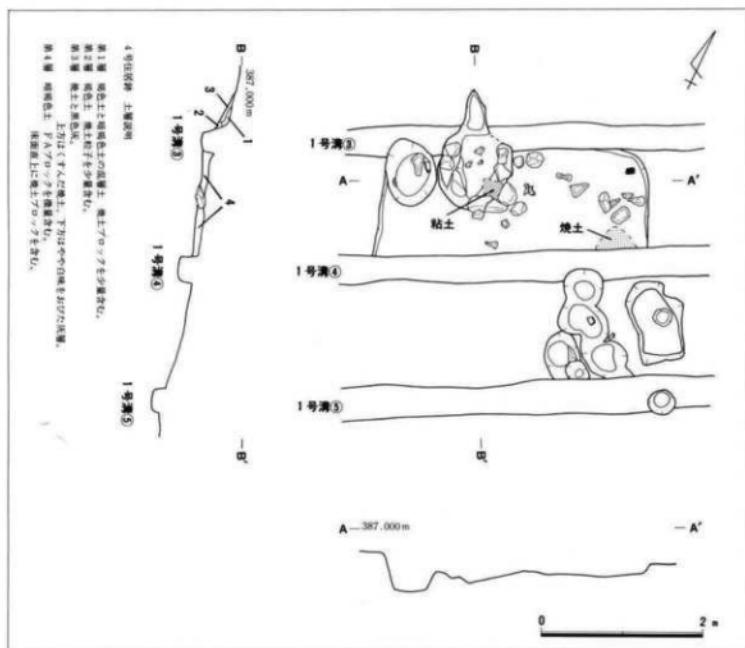
3号住居跡は、調査区のほぼ中央（010-335G）で確認された。確認面の海拔は386mである。主軸は西と判断した。カマドの底部分と思われる焼土のみ確認できたが、残存状態は良くない。床は地山のローム土を掘り込んだ上に貼床がしてあった。壁は北側、東側ともにはば垂直に立ち上がっている。遺物は土器器の甕、須恵器の杯、壺、羽釜のほか土鍤、鐵鏃が出土している。

### 6号土坑

6号土坑は3号住居跡の南西で確認された。平面形は東西方向を長辺とする楕円形で、覆土はロームブロックを含む暗褐色土である。



第7図 3号住居跡・6号土坑



第8図 4号住居跡

#### 4号住居跡

4号住居跡は、調査区の北東寄り(020-325G)で確認された。確認面の海拔は386.5mである。住居跡の南側は削平されている。

主軸は北北西である。この4号住居跡のカマドは真紅と言って良いほどの鮮やかな濃い赤色で、残存状況も良好であった。

床は、地山のローム土を掘り下げたものである。このローム土は褐色でやや灰色味を帯びた粘土質に近いものである。カマドの西側で確認されたピットは貯蔵穴と考えられる。東側の床面で炭化物片、礫、焼土が確認できた。

壁の立ち上がりはほぼ垂直であり、しっかりとした地山のローム土が立ち上がっている。覆土は地山の褐色ローム土が混入する暗褐色土であった。

4号住居跡は、東西方向に走る耕作溝に搅乱されているが、残存状態は良く、遺物も土器器の甕、壺などが出土している。

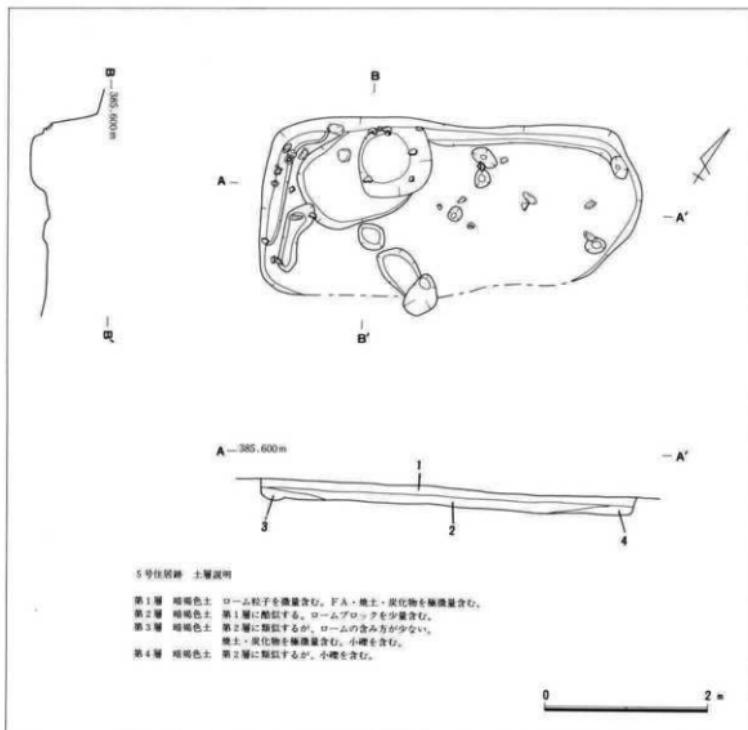
### 5号住居跡

5号住居跡は、調査区のはば中央（010-330G）で確認された。確認面の海拔は385mである。住居跡の南側は削平されている。

カマドについては、その痕跡も含めて確認はできなかったが、主軸は西南西から東北東であると推測される。本遺跡の住居跡のカマドは、西と北西のものが多いことを考えれば、カマドは存在しなかった可能性も考えられる。

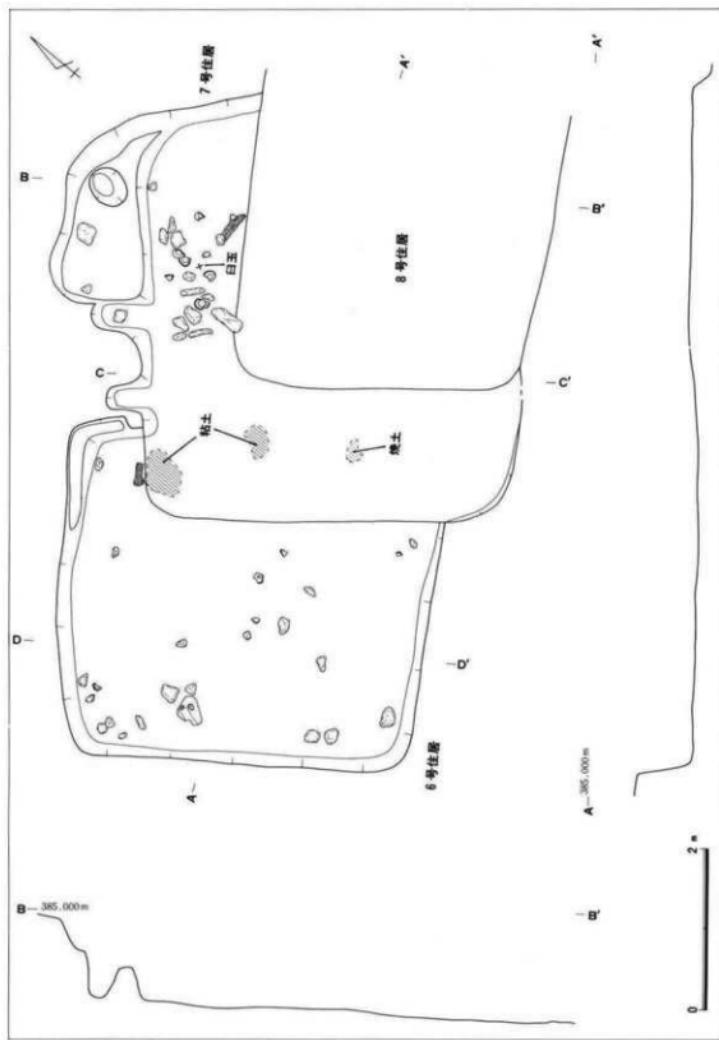
壁は地山のローム土がほぼ垂直に立ち上がり、床は一部を貼床している。壁の立ち上がり部分には周溝がまわる。床の北西寄りの部分にピットがあり、灰釉陶器の皿が出土した。覆土はFA粒子を僅かに含む暗褐色土である。

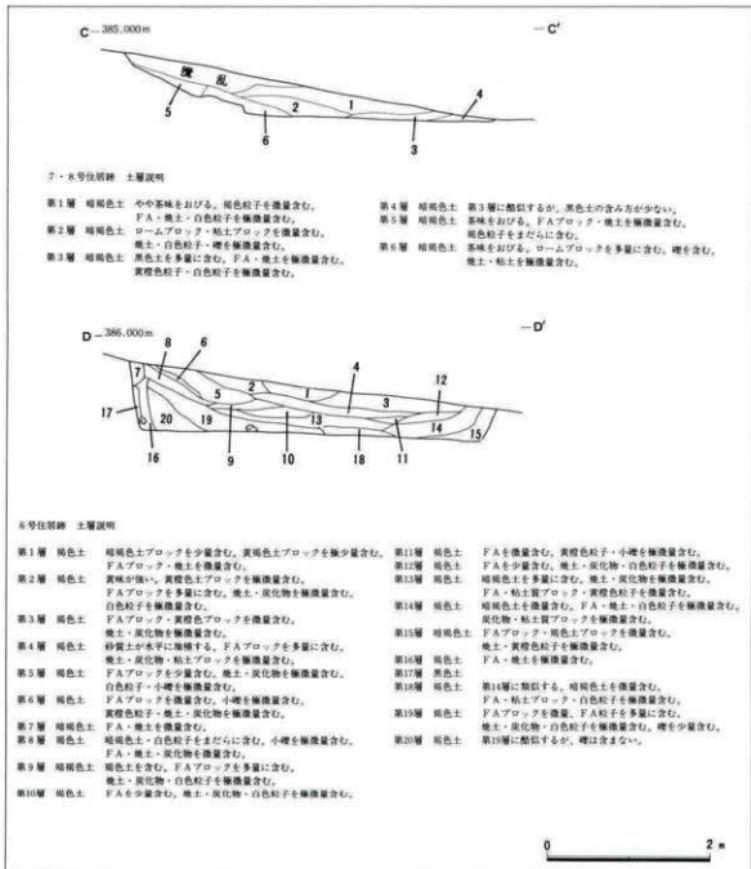
遺物はほかに、須恵器の壺、壇、羽釜などが出土している。



第9図 5号住居跡

第 10 図 6・7 号住居跡 (1)



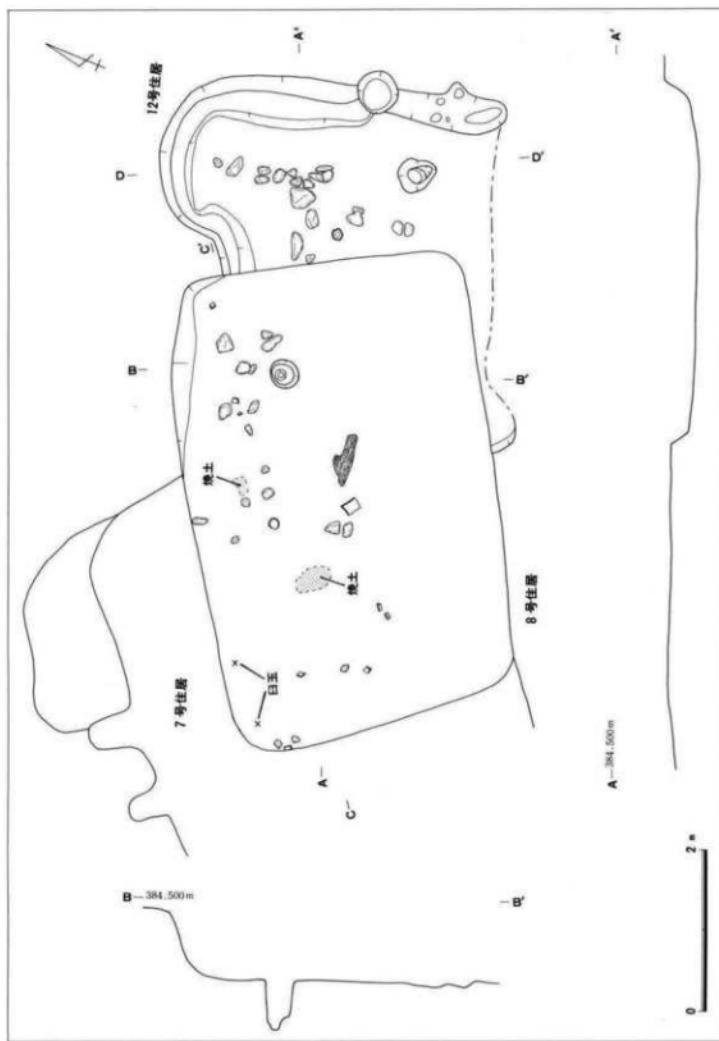


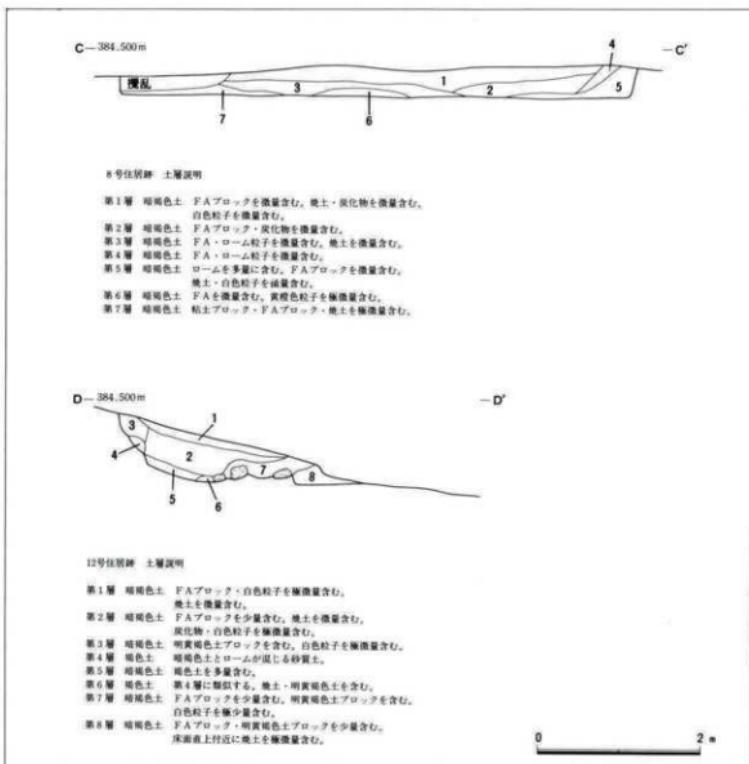
第11図 6・7号住居跡 (2)

#### 6・7・8・12号住居跡

6・7・8・12号住居跡は、調査区の南側（0 0 0 - 3 3 5 G - 0 0 0 - 3 4 5 G）で確認された。確認面の海拔は3 8 4 mである。6号住居跡以外は住居跡の南側が削平されている。この4つの住居跡は切りあっており、重複関係は、7号住が6号住を切り、この7号住と12号住を8号住が切っている。

圖 12 圖 8 · 1 2 号住居跡 ( 1 )





第13図 8・12号住居跡（2）

6号住居跡は、比較的の残存状態の良い住居跡であるにもかかわらず、カマドは確認できなかった。北西、南西、東側の壁については立ち上がりが確認できたが、北東壁については7号住居跡に切られている。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、北西壁では床面から5.5cmほどの高さの部分で1.0cmほどの水平のテラス状の段差が確認された。遺物は土師器の环が出土している。

7号住居跡の主軸は北西である。確認された2つのカマドはいずれも7号住居跡に伴うものと判断した。住居跡の北西に焼土の塊が確認された。その南側の粘土・焼土ブロックを含めて7号住居跡のものである。壁面は北西部のみ確認できた。6号住居跡との境で、明らかに7号住居跡が切っていることが確認できたが、7号住居跡の南西側の壁の立ち上がりは確認できなかった。立ち上がりはほぼ垂直であるが、床から6.0cm

のところで外側にテラス状の段差が張り出していた。この部分の大きさは  $2\text{ m} \times 1\text{ m}$  でピットが 1 つある。床は南西側と北西側のみ L 字型に確認できた。残りの南東側は 8 号住居跡に切られていて残存していない。カマド付近には焼土ブロック・炭化物片が多く散らばっていた。覆土は暗褐色土で FA ブロックを僅かに含んでいる。遺物は、土師器の杯のほか、白玉が出土している。

12 号住居跡は西側を 8 号住居跡に切られている。壁を確認できたのは北壁及び東壁で、ほぼ垂直に立ち上がっていた。カマドは確認できなかった。

8 号住居跡については、はっきりとプランを確認できなかったものの、床面ははっきりしており、その床面の高さは 12 号住居跡より高い。また、12 号住居の床面との間からは、直径  $20\text{ cm}$  ほどの礫が多く確認された。遺物は土師器の甕、壺が出土しているが、量的に少なく、7 号住居跡との遺物の差が顕著である。

### 9 号住居跡

9 号住居跡は、調査区の南西隅（995-350G）で確認された。確認面の海拔は  $385\text{ m}$  である。住居跡の南東部分は壁の上部が削平されているものの、残存状態は良い。

主軸は北西方向である。カマドは灰や炭化物粒等から使用した痕跡が確認できるが、土は赤味を帯びていない。袖は地山のロームにぶい橙色の粘土と黒色土を貼り付け、石を設置している。

地山は東側が黒色土、西側はやや粘性のあるローム土で、壁はこの地山がほぼ垂直に立ち上がる。残存壁高は西隅で  $105\text{ cm}$ 、東隅で  $15\text{ cm}$  である。住居跡の南東側はテラス状に壁面の上部に段差ができる。

床面は、黒色土と褐色土が混ざった土で貼床されていた。その床に残存状態の良いピットが 4 本確認されたが、これは主柱穴と考えられる。このうち、カマドに近い 2 本の深さは床面から  $40\text{ cm}$ 、残る 2 本は  $50\text{ cm}$  である。また、カマドの南側には貯藏穴と考えられる正方形のピットが確認された。深さは床面から  $55\text{ cm}$  である。

覆土は FA ブロックを含む褐色土である。遺物は土師器の壺、須恵器の環、蓋などが出土している。

### 10 号住居跡

10 号住居跡は、調査区の南西隅（995-350G）で確認された。確認面の海拔は  $386\text{ m}$  である。北西の壁のみははっきりと確認できた。カマドは確認できなかった。

地山のローム土を掘り込んで床面と壁としている。10 号住居跡で確認された礫の半数ほどは焼けて熱を受けた状態になっている。覆土は暗褐色土に明黄褐色土が混ざった状態で、FA ブロックを僅かに含んでいる。

遺物は須恵器の環、壺、羽釜などのほか、砥石が出土している。

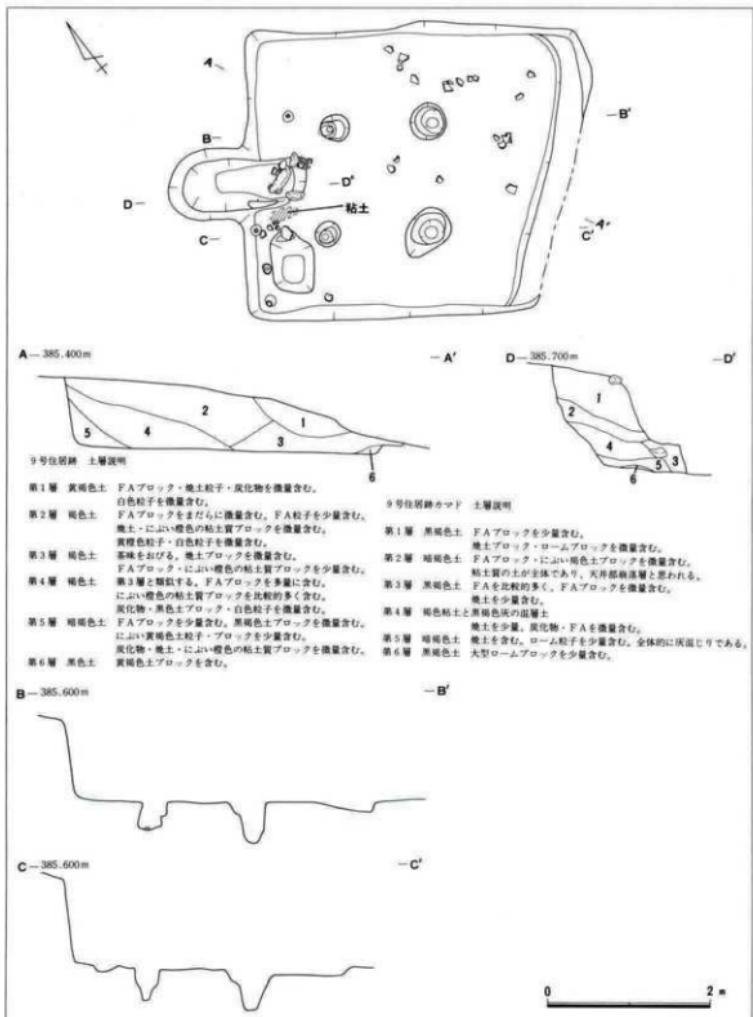
### 11 号住居跡

11 号住居跡は、調査区の東側（015-315G）で確認された。確認面の海拔は  $383.5\text{ m}$  である。カマドは確認できなかったが、南東部分に焼土のまとまりが確認できた。

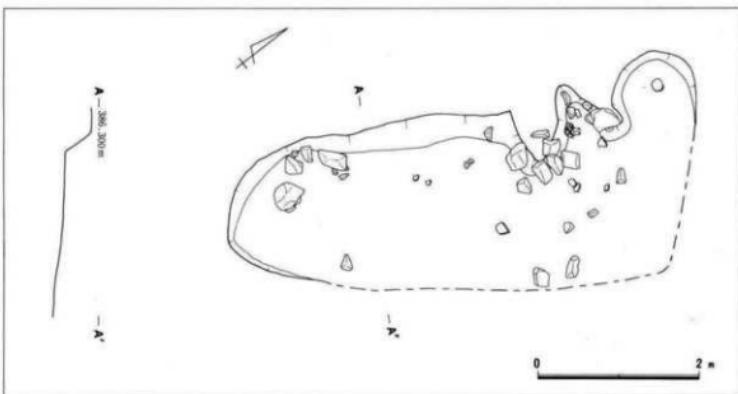
壁はやや緩く立ち上がる。床は住居跡の南側で黒褐色土の非常に固く締まった貼床が確認されたが、北壁寄りの部分では地山のローム土を床としている。

覆土は暗褐色土で FA ブロックを僅かに含んでいる。地山のローム土は径  $20\text{ cm}$  ほどの礫を含む。

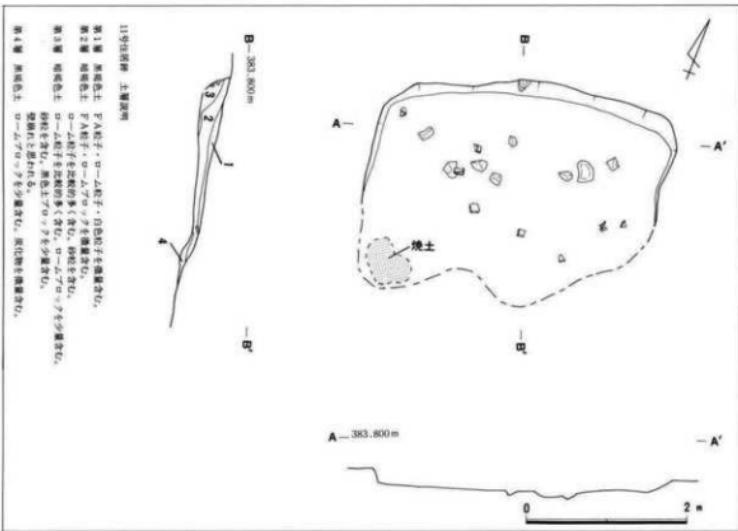
遺物は須恵器の环などが出土している。



第14図 9号住居跡



第15図 10号住居跡



第16図 11号住居跡

### 13号住居跡

13号住居跡は、調査区の東端（015-310G）で確認された。確認面の海拔は383mである。住居跡の南側は2号土坑に切られている。カマドは確認できなかった。

壁は地山のローム土がほぼ垂直に立ち上がり、床は黒褐色土で強固に貼床されていた。この床面には、径10cmほどの地山の礫が多数確認された。覆土は黒褐色土でロームブロック・砂粒を含む。

遺物は少なく、東側の床面から刀子が出土したほかは、土師器片、須恵器片が少量出土したのみである。

### 2号土坑

2号土坑は、13号住居跡の南側（010-305G）で確認された。13号住居跡よりも新しい。南及び東側で構造の範囲を確認することができなかつた。覆土は黒褐色土で、一部柏川テフラを含んでいる。

### 15号住居跡

15号住居跡は、調査区の北東（020-325G）で確認された。確認面の海拔は386.5mである。この住居跡は東側が調査区外であるので、確認されたのは平面的に1/2程度である。

主軸は北西である。カマドは確認できたが耕作溝に切られていた。壁ははっきりと地山のローム土がほぼ垂直に立ち上がる。床は地山のローム土である。土層断面は、覆土を含めたものが現在の地表面から住居跡の床面まで一括で確認できた。調査区の西側から比べると現在の地表から地山のローム土までの深さは浅くなっている。覆土は黒褐色土でFA粒子を含んでいる。

遺物は少ないものの、須恵器の壺、壇などが出土している。

### 16号住居跡

16号住居跡は、調査区の南側（005-320G）で確認された。確認面の海拔は382.5mである。住居跡の東部分は壁の上部が削平されているが、残存状態は良い。

主軸は西方向である。カマドは良く焼けており、カマド付近の床面も赤く焼けた状態が確認できた。袖は地山のローム土に粘土を貼り付けた後、石を設置している。カマドの覆土は、褐色土の粘土質の層と焼土ブロックとなった層が確認できた。確認面からカマド底部までの高さは65cmほどである。

壁ははっきりと、ほぼ垂直に立ち上がっている。地山の西側はローム土で、東側は黒色土である。覆土は黒褐色土で、ローム粒とFA粒子を含んでいる。床面はピットは確認されなかつた。

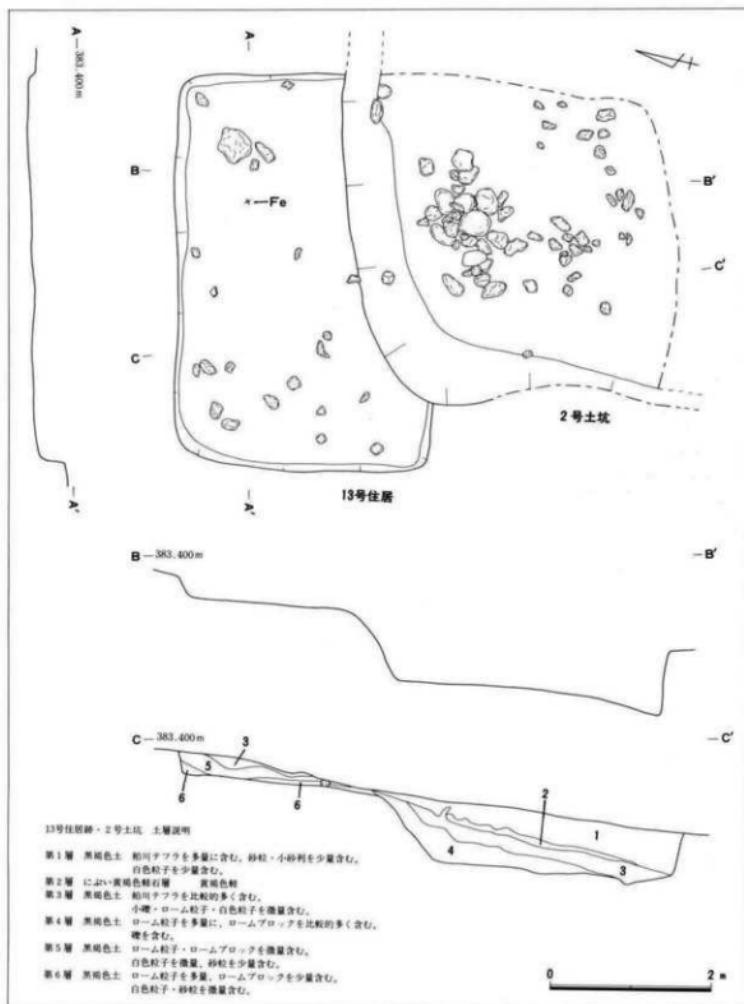
遺物は、土師器甕の破片や石製鍊車が出土している。

### 1号土坑

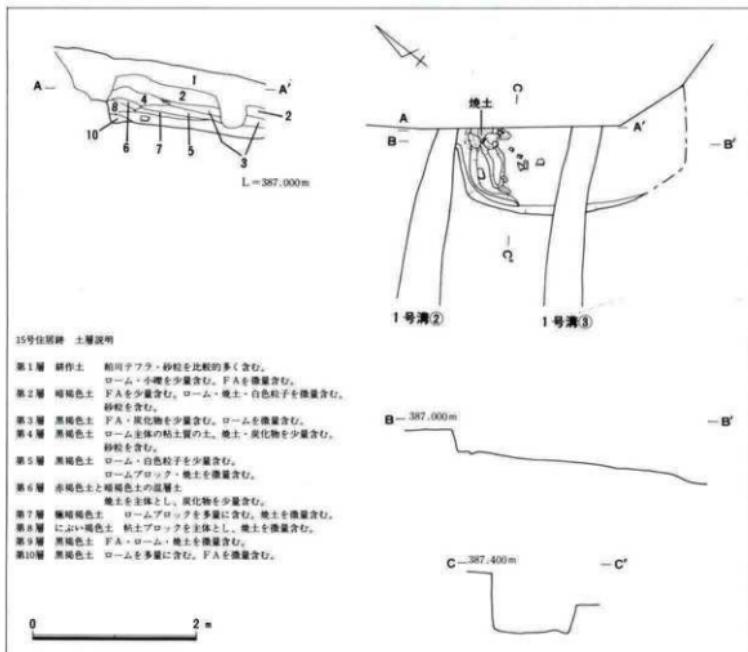
1号土坑跡は、16号住居跡の北西（005-320G）で確認された。確認面の海拔は383.5mである。残存状態は良く、プランははっきりと確認できた。平面形は東西方向を長辺とする長方形である。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。覆土はFAブロックを含む黒褐色土である。

### 3号土坑

3号土坑は、調査区のほぼ中央（015-330G）で確認された。平面形は円形で、覆土はローム粒、FA粒を含む黒褐色土である。遺物は土師器片、須恵器片が若干出土している。



第17図 13号住居跡・2号土坑



第18図 15号住居跡

#### 4号土坑

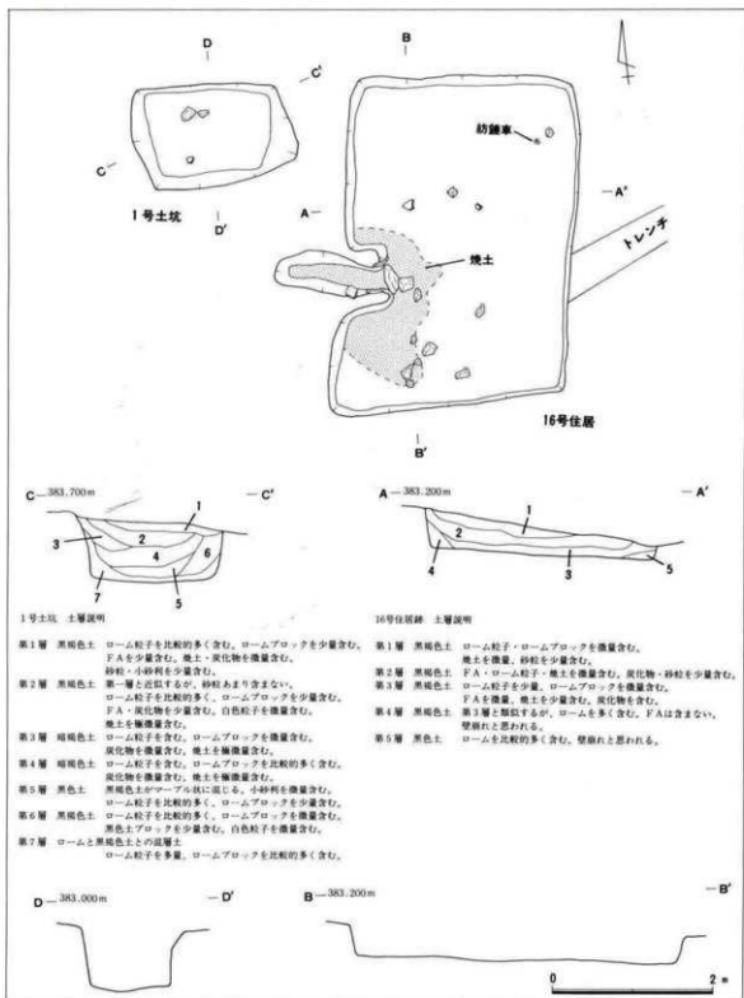
4号土坑は、調査区の中央や西側（010-340G）で確認された。平面形は円形である。覆土に焼土層が見られることから、削平された住居のカマド跡とも考えられる。遺物は須恵器甕の破片や壺が出土している。

#### 5号土坑

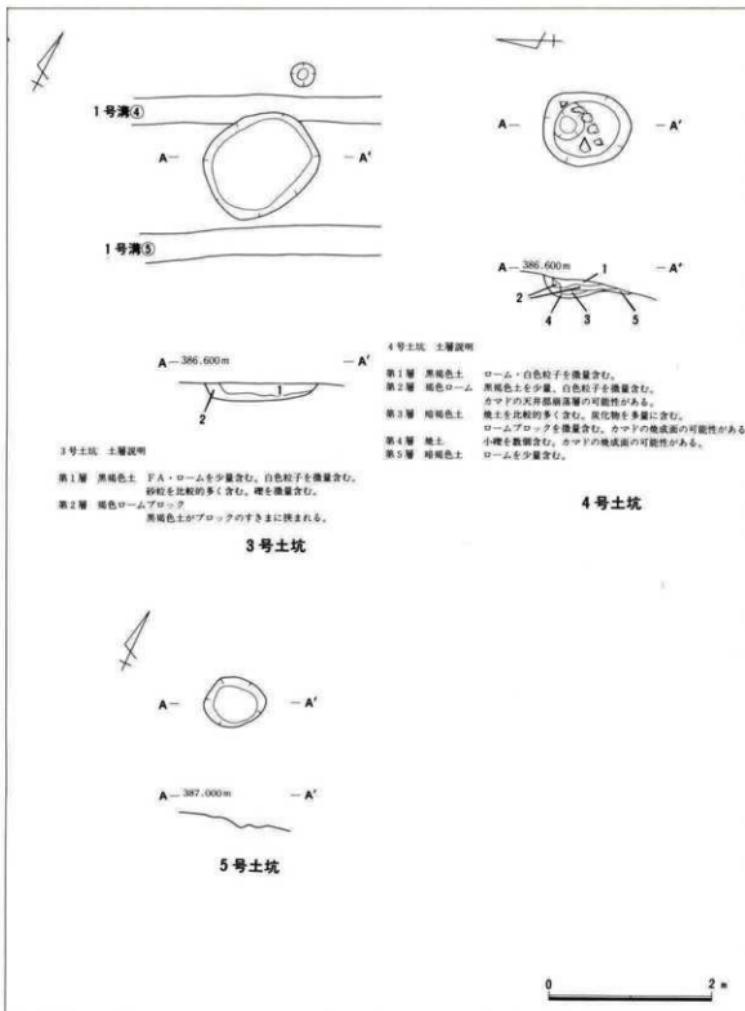
5号土坑は、調査区の北西（010-350G）で確認された。平面形は梢円形で、覆土は暗赤褐色土である。

#### 2号溝状造構

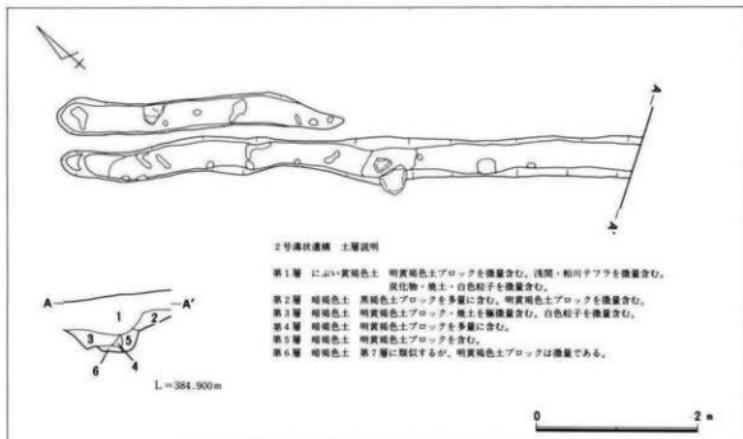
2号溝は、調査区の南西隅（990-350G）で確認された。北西から南東方向に走向しており、覆土はロームブロックを含む暗褐色土である。



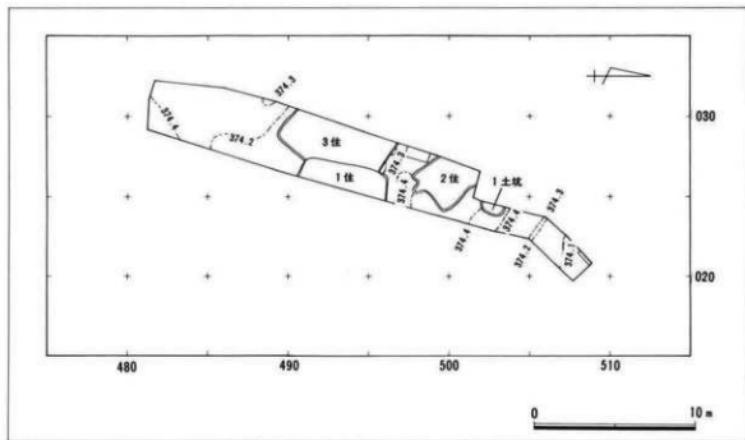
第19図 16号住居跡・1号土坑



第20図 3・4・5号土坑



第21圖 2號溝狀遺構

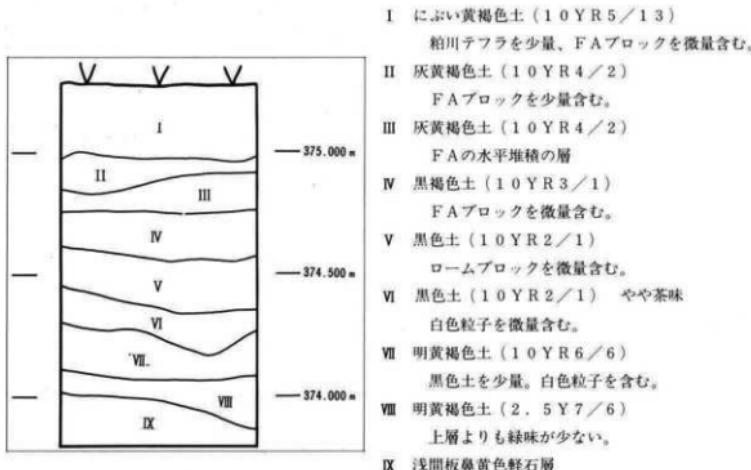


第22図 桃瀬遺跡B区全体図

## V 桃瀬遺跡B区

### 1 基本層序

柏川テフラが混入する表土の下層でFAの堆積が確認されたのは、調査区の北端及び南端付近である。北端ではやや南傾斜に堆積し、南端付近においては自然地形の斜面にそって落ち込むように50cmもの厚さで確認された。その下には黒色土が堆積し、さらにその下にローム層が堆積している。調査区の北側では、現在の地表面からローム層まで110cmほどの深さである。



第23図 桃瀬遺跡B区基本土層

### 2 調査の概要

本調査に先立ち、試掘調査を中之条町教育委員会が行った。調査区は道跡脇の畑部分である。畑の端には水路があるため、試掘調査では水の影響を受けない部分にトレーンチを設定した。この試掘調査で複数の住居跡が確認されたため、これらの住居跡の範囲を確認した後、トレーンチ幅を広げて本調査を実施した。

調査で確認された遺構は、住居跡3軒、土坑1基である。

### 3 検出された遺構と遺物

#### 1号住居跡

1号住居跡は調査区のほぼ中央（495-025G）で確認された。確認面の海拔は374mである。住居跡の壁の上部は削平されている。住居跡の東側は調査区外である。

1号住居跡は、西側の4分の1ほどが調査区内にあるだけで、カマドもこの範囲では確認できなかったので、主軸については不明である。住居跡の壁はやや緩く立ち上がっている。

覆土は比較的粘性のある黒褐色土で、FA粒子を僅かに含む。床面からはピットが3個確認され、1個は貯蔵穴と思われる。その覆土はロームブロックを多く含む黒色土である。

遺物は土師器片が僅かに出土したのみである。

#### 2号住居跡

2号住居跡は調査区の北側（500-025G）で確認された。住居跡の約3分の2が調査区内に位置する。確認面は海拔の374.4mである。

主軸は南東方向である。カマドの残存状態としては、東側の立ち上がりが不明確であった。焼けた橙色味を帯びたカマドの焼成面は、しっかりとした焼土で炭化物が面的に含まれていた。

床面の貼床は、しっかりとした状態では残存していないが、地山のローム層の上に暗茶味がかったローム土にて行われている。壁の立ち上がりは、やや外側に傾斜している。この立ち上がりの部分には周溝がまわっており、西側の壁の下からカマドまで確認された。ピットはいくつか確認されたが、柱穴は不明である。遺物は、カマドから土師器の甕が出土している。

#### 1号土坑

1号土坑は、1号住居跡の北側（505-020G）で確認された。底面はほぼ水平である。西側は調査区外であるので平面形は不明である。覆土はロームブロックを含む暗褐色土である。

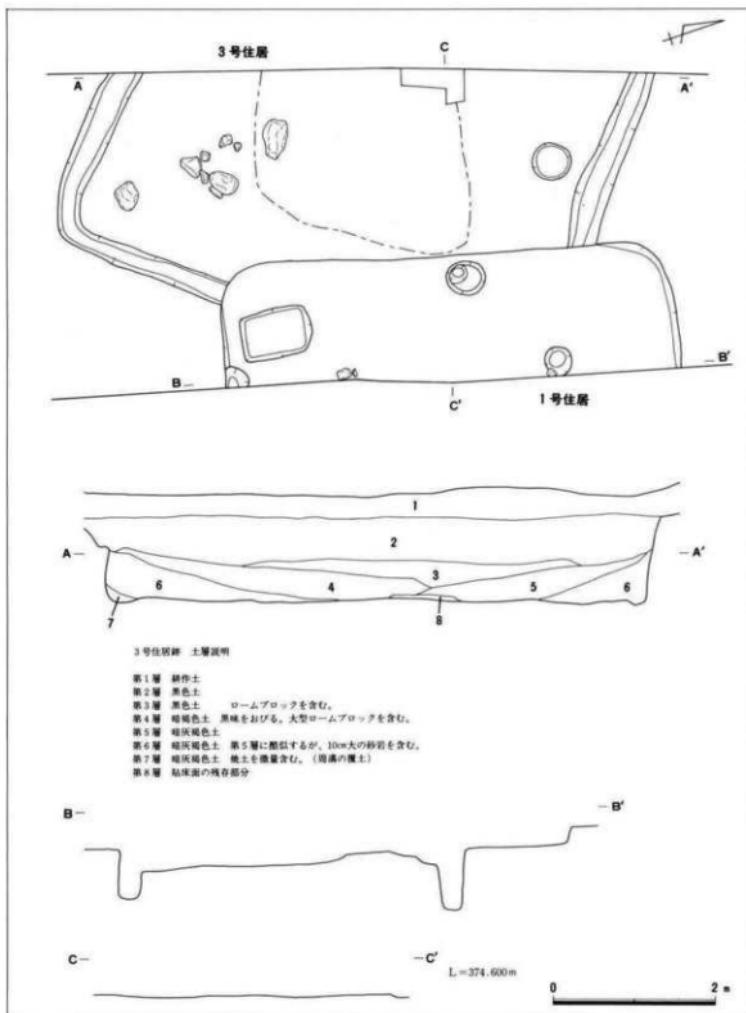
#### 3号住居跡

調査区のほぼ中央（495-025G）で確認された。調査区内で確認されたのは住居跡の3分の2程度で、西側は調査区外である。

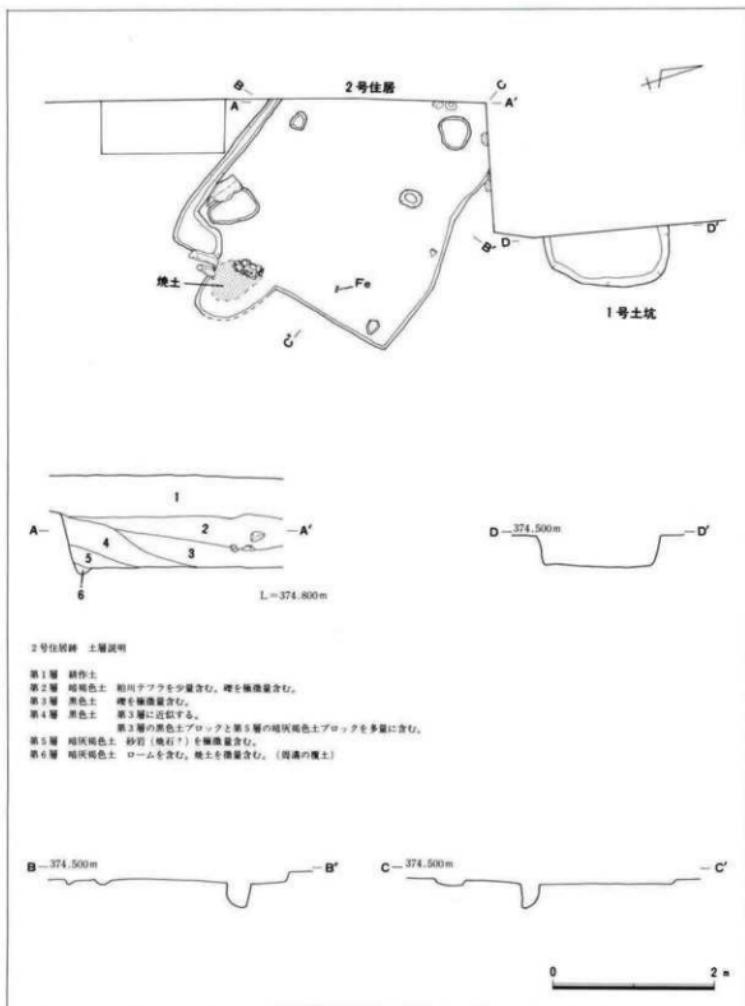
床面はほぼ水平で、中央には貼床の痕跡が残る。貼床は黒色土ブロックやFA粒子を含む明黄褐色土である。カマドは確認できなかった。残存壁高は10cmから30cmで、壁の立ち上がりの下には、周溝がまわっている。周溝の部分の土は、焼土粒子を微量含む。ピットは3個確認できたが、柱穴と判断できたのは、東側のピットのみである。床面から遺物の出土はほとんど無かった。

土層断面は、地表面から確認できた。表土には、柏川テフラが微量に含まれるが、耕作土のためかまんべんなく混入された状態である。表土とその下層の黒色土との境の面は、鉄分のためか灰茶味を強く帯びる。黒色土は下位でロームブロックを含む。床面直上の覆土は、FAブロック・ロームブロックを含んでいる。

遺物は、土師器片が若干出土したのみである。



第24図 1・3号住居跡



第25図 2号住居跡・1号土坑

中沢遺跡C区



中沢遺跡C区全景



1号住居跡全景



1号住居跡A カマド全景



5号住居跡遺物出土状況



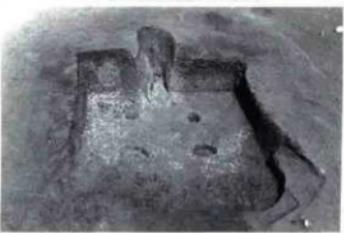
5号住居跡全景



6号住居跡遺物出土状況



6・7・8・12号住居跡全景



9号住居跡全景



13号住居跡・2号土坑遺物出土状況



15号住居跡全景



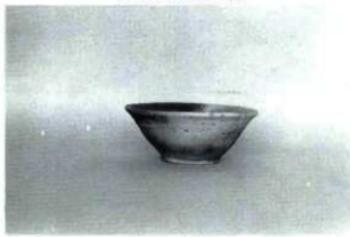
16号住居跡全景



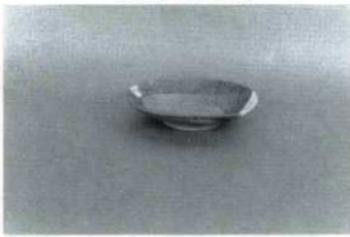
2号溝状造構全景



1号住居跡出土遺物



3号住居跡出土遺物



5号住居跡出土遺物



8号住居跡出土遺物



9号住居跡出土遺物①



9号住居跡出土遺物②



15号住居跡出土遺物

桃源遺跡B区



2号住居跡出土遺物

中之条町埋蔵文化財発掘調査報告書第14集

横尾地区遺跡群III

県営ほ場整備事業横尾地区に伴う埋蔵文化財発掘調査概報

中沢遺跡C区・桃瀬遺跡B区

印刷・発行 平成8(1996)年3月29日

編 集 群馬県中之条町教育委員会社会教育課

發 行 群馬県中之条町教育委員会

〒377-04

群馬県中之条町大字中之条町1901番地

TEL 0279-75-2111

印 刷 大道印刷工業